
『竜滅士 ドラゴンバスター 』

想隆 泰気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『竜滅士 ドラゴンバスター』

【Nコード】

N1001N

【作者名】

想隆 泰気

【あらすじ】

聞こえぬはずの獣の嘶きに苛まれる少女。
心も体も浸食され、日常すらも失われようとした時、少女は一人の少年に出会う。

果たして少年は何者なのか。そして脳裏に木霊する獣の声は何なのか。

何も分からないままに、少女は日常の外側へ足を踏み入れる

竜滅士 ドラゴンバスター【1】

【1】

グルルルル……

……と。

獣のような低いうなり声が、少女には聞こえていた。

それがいつからだったのか、彼女には分からない。

だが、気づいた時にはもう、誤魔化しようのない現実感を持った音として、それは彼女の脳内に木霊していた。

グルルルル……

怒気を含んだような、憎悪を感じさせるような、くぐもったうなり。どこからともなく聞こえてくる声。

それは日増しに大きくなって、少女の心と体を浸食していく。脳内に響く轟きは頭痛を誘発し、体を重くした。

それでも少女の日常は、変わることなく進んでいく。

朝がくれば起きて、顔を洗い、慌ただしく食事をして、学校へ行く。

痛む頭蓋と重い体を引き摺りながらも、少女はまだ日常の中にあつた。

だが、既に体の不調は到底誤魔化せるようなものではなくなっていた。視界は狭くなり、眼は霞み、五感は鈍い。

だから、その接近に彼女は気づかなかった。

ドンッ

と、衝撃が走った。

「きゃ……………!？」

ふいなことに、少女は為す術もなく道の真ん中で尻餅を突いた。

「いたた……………もー……………なーに……………」

何が起きたのかも分からないまま、少女は眼前を見上げようとした。

だが、頭痛が酷くて思うように顔が上げられない。

「つつ……………」

思わず呻いて、頭を抱えた。

そんな時だった。

「……………大丈夫ですか、お姉さん」

優しい、穏やかな声がした。

何とか顔を上げると、そこには一人の少年が立っていた。

浅黒い肌に黒い短髪。声と同様に、穏やかな笑顔を浮かべる少年。おそらくは少女よりも二つ三つは年下。雰囲気から考えれば、少々小柄な中学生といったところだろうか。

首から提げた、小さな竹筒の連なったアクセサリーが印象的だった。

ついでに言えば、転倒の原因は彼だったらしい。

「……………立てますか？」

問われて、少女はハツとした。無意識ながら、ぼけっと見つめてしまっていた。

「あっ！ は、はいっ！」

年上の威厳など欠片もない返事をして、少女は差し出されていた細い手を取った。

「ごっ、ごめんなさいっ、ちょっとぼーっとしててっ……………」

ようやく立ち上がった少女はあたふたと謝罪したが、少年は変わ

らぬ微笑みでゆるりと首を振った。

「いいえ。僕の方こそ、捜し物をしていたもので。ごめんなさい、お姉さん」

そう言って、ぺこりとお辞儀をする少年。

その仕草があまりに愛らしくて、少女は一時、体の不調も忘れ、少しだけ穏やかな気持ちになって頬を染めた。

だが、その時だった。

グルルルル……

と。

また、あの重苦しい、くぐもったうなり声が脳裏を木霊した。

「つつっ……！？」
思わず蹲る。

「近い」

ぼつりと。少女の頭上で、そんな声がした。他でもない。少年の声だ。

「っ……？」

頭の痛みに顔を歪めながらも、少女は少年を見上げる。

彼は、何かを警戒するように、周囲をきょろきょろと見回していた。

が、ふいにハツとしたように眼を見開いて、少女を見た。

「そうか、これは」

しかしその言葉は、最後まで続かなかった。

「！ いけないっ！」

少年はふいに焦ったような声を上げると、そのままの勢いで少女の体を押し倒した。

「きゃうんっ！？」

思わず、間抜けな声を漏らしてしまう少女。行動の突飛さと言うよりも、少年の顔に似合わぬ大胆な行動にどきりとしてしまう。だが次の瞬間、そんな少女の平和な感情を吹き飛ばすように、激しい轟音が辺りに鳴り響いた。

「っ……！？ え！？ な、なにっ！？ なにごとっ……！？」

少年の体の下で、狼狽した声を上げる少女。

聞いたこともない、形容しがたい音だった。硬質な何かを強引に破壊したような、激しいけれど鈍い音。轟音、としか表現できない音。

当然だ。何の変哲もない思春期の少女に、ブロック塀を派手に粉碎する音など聞いたことがあるはずもない。

二人が倒れ込む頭上。丁度、少女の上半身があった辺り。その辺りにあったはずのブロック塀が、何かの機械で抉り取ったようになくなっていった。

まるで、どら焼きを嚙った時の跡みたいだな、なんて少女は思った。突然の出来事に、状況判断が追いついていなかった。

否。こんな状況をいつたい誰が即座に理解できると言うのか。しかし、困惑する少女に、少年は覆い被さったまま、追い打ちをするように言った。

「僕が探していたのは お姉さんだったんですね」

そうして少女は、日常の外側に足を踏み入れた。
アウトプレン

【つづく】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1001n/>

『竜滅士 ドラゴンバスター 』

2010年10月15日21時10分発行